

デスによる丁寧表現

丹羽一彌

キーワード 丁寧表現 デス・マス デスの職能 体系の変化

要旨

最近、「寒い」の丁寧な表現には「寒いです」が使われている。形容詞に接続したこのようなデスと名詞述語「春です」のデスとは文法的に異なる種類である。この新種のデスを採用したために、丁寧表現は新しい体系に向かって変化することになった。新旧の丁寧表現は異なる原理によって構成されているので、過渡期にある現在の体系は形式的に不統一の部分がある。

1 文法的枠組みと名詞述語

本稿での文法用語や枠組みを説明するために、最初に述語構造に関する筆者の見解を述べておきたい。文法的職能で整理すると、現代日本語の述語は次のような構造になっている。

[[[命題]判断]態度][働きかけ]

このそれぞれの枠の定義、その中に入る形態素の種類や順序、先行諸説との相違などについては丹羽(2005)で述べた。必要なところを簡単にまとめると、[命題]の枠には伝達したい客観的な情報、[判断]にはそれについての話し手の主観的な把握の仕方、[態度]には対話場面でそれを伝える話し手の表現態度、最後の[働きかけ]には念押しなど聞き手に向けた形式が入る。形式の相違を基準とする考え方であれば、学校文法的な用語や単位でもほぼ同じことが言えると思うが、本稿では筆者の用語で述べていく。単位は形態素を基準とするが、それより大きいものを便宜的に1単位とすることもある。

現代日本語の動詞や形容詞は、語幹に-u、-e、-oo、-iなどを接続させて、上の枠組みに則った述語になっている。これら-uなどの形式は話し手の[態度]を表しているので、(1)~(4)は同じ文法構造の述語である。

- | | | | | | |
|---------|---------------|----|------------|----|------------|
| (1) 書く | [[[kak]]-u] | 意味 | [[[書く]]]叙述 | 職能 | [[[命題]]]態度 |
| (2) 書け | [[[kak]]-e] | 意味 | [[[書く]]]命令 | 職能 | [[[命題]]]態度 |
| (3) 書こう | [[[kak]]-oo] | 意味 | [[[書く]]]意志 | 職能 | [[[命題]]]態度 |
| (4) 寒い | [[[samu]]-i] | 意味 | [[[寒い]]]叙述 | 職能 | [[[命題]]]態度 |

名詞は、古典の「春はあけぼの」や訳詩での「時は春」など特別なものを別とすれば、単独で述語となることはない。現代語の文で、過去のタや[態度]の形式などを接続させるためには、名詞+ダの形にして「活用」する述語にしなければならない。ダは本稿の直接のテーマではないので、デスと関係するところを触れる程度にしておく。

ダは断定の助動詞とされているが、この「指定・断定」は、話し手の知識や判断力によってXをAと定めることではなく、ある情報を述語として指定するということである。以下ではダの意味

を「断定」とするが、「彼は日本人だ」などの断定だけではなく、「昼は天井だ」、「ぼくは定食だ」などのダを含めると、「述語化」というのが正確であろう。こうしてダで述語化された形式は、話し手の[態度]も表しているので、「春だ」のダは-da-φという2個の形態素からなると解釈される。-da-が述語化という断定を表し、-φは上の(1)の叙述-uに相当するゼロの異形態である。ダはデアルと同じであるから、-da-の部分の職能は[命題]とする。そうすると、(5)以下の「春だ」は、述語に指定した「春」をそのまま叙述したものであり、「春だった」はそれを過去のことと認識して叙述したもの、「春だろう」はそれを推量という態度で表現したものであるということになる。

- (5) 春だ [[haru-da]]-φ [[[春・断定]]叙述]
 (6) 春だった [[[haru-daQ]-ta]-φ [[[春・断定]過去]叙述]
 (7) 春だろう [[[haru-dar]]-oo] [[[春・断定]]推量]

上の-da-、-daQ-、-dar-は、異なった環境に現れる異形態の関係である。しかしこれらが異形態と言えるのは名詞述語など場合であって、-dar-には異なるところがある。それは-dar-を含むダローの現れる環境である。ダ、ダッタ、ダローの前接する形式によって環境を分け、それぞれの出現状況を見ると、表1ようになる。

表1 ダなどの出現環境

名詞、それに相当する形式	春ダ	春ダッタ	春ダロー
形容動词语幹	静かダ	静かダッタ	静かダロー
そうだ(形容動詞型の助動詞)	死にそうダ	死にそうダッタ	死にそうダロー
動詞(派生動詞を含む)	×	×	書くダロー
形容詞	×	×	寒いダロー
ない(形容詞型の助動詞)	×	×	書かないダロー
たい(形容詞型の助動詞)	×	×	書きたいダロー

ダとダッタは名詞などに接続するだけであるが、ダローは全ての環境に現れる。ダ・ダッタとダローとは、叙述と推量という意味だけではなく、用法も異なるのである。このダローの特徴については丁寧表現デショーのところでもまとめて述べる。

2 2種類のデス

本節では名詞と形容詞に接続する2種類のデスの相違を明らかにする。ただし述語を構成する形態素の位置や役割などを記述的な観点から述べるのであって、敬語のゆれというような社会言語学的な面には触れない。従って全国共通語またはそれに近い言語について述べ、地域差や世代差などには触れない。

前節(5)～(7)の形式に丁寧さを表す形態素(-s-、-si-、-sj-)を付加すると、(8)～(10)となる。本節ではデスとデシタを取り上げ、デショーは次節で扱う。

- (8) 春です [[[haru-de]-s]-u] [[[春・断定]丁寧]叙述]
 (9) 春でした [[[haru-de]-si-ta]-φ] [[[春・断定]丁寧・過去]叙述]
 (10) 春でしょう [[[haru-de]-sj]-oo] [[[春・断定]丁寧]推量]

表1の基準でこれらの出現状況を見ると、次ページの表2のようになる。表1と表2とを比べ

表2 デスなどの出現環境

名詞など	春デス	春デシタ	春デショー
形容動詞語幹	静かデス	静かデシタ	静かデショー
そうだ	死にそうデス	死にそうデシタ	死にそうデショー
動詞	×	×	書くデショー
形容詞	寒いデス	×	寒いデショー
ない	書かないデス	×	書かないデショー
たい	書きたいデス	×	書きたいデショー

ると、ダッタとデシタは名詞などだけに接続しているし、ダローとデショーは全ての環境に現れている。それぞれの分布は一致しているので、非丁寧表現と丁寧表現として対応している。

ところが表1のダと表2のデスの分布は一致していないので、デスを一括してダの丁寧表現とすることはできない。表2のデスは、ダを丁寧にしたものと、ダの接続しない形式を丁寧にしたものの2種類に分けなければならない。ダは名詞などを述語にする形式であるから、名詞述語のダを丁寧にしたデスは述語化の役割を保持しているが、単独で述語となる形容詞に接続したデスは述語化とは無関係である。そうすると後者は丁寧という1個の意味だけを表すから、形式全体で1個の形態素ということになる。

(11) 春です haru-de-s-u 春+断定+丁寧+叙述

(12) 寒いです samui-desu 寒い+丁寧

以下では、断定+丁寧を表す(11)のデスを「A類のデス」、丁寧だけの(12)のデスを「B類のデス」とする。(A・Bという名称は辻村(1964)でも使われているが、本稿と逆になっている。)

この2種類のデスの文法的・意味的な相違は、デスと過去のタとの関係を見ることによって確認できる。デスとタが共起すると、表3のように両者は異なった順序で現れる。

表3 デスとタの共起

名詞など	春デシタ	×
形容動詞	静かデシタ	×
そうだ	死にそうデシタ	×
動詞	×	×
形容詞	×	寒かったデス
ない	×	書かなかったデス
たい	×	書きたかったデス

デスとタのセットが名詞などに接続した場合にはデス+タ(デシタ)となるが、形容詞などに接続すると逆のタ+デスである。デスがタの前か後かは、上で分類したA類とB類の区別に一致している。

A類 春デスとタの共起 → 春デシタ (デス+タの順)

B類 寒いデスとタの共起 → 寒かったデス (タ+デスの順)

本稿冒頭で述べた文法的枠組みでは、今問題としている過去のタは「判断」の枠の最後尾に現れる

形式であって、タに後続するのは[態度]の形式である。従ってタの前に現れているA類のデスは話し手の判断を表し、タに後続しているB類のデスは話し手の表現態度を表している。従ってそれぞれの構造は次のようである。

デシタ(A類デス+タ) [[[-de]-si-ta]-φ] [[[断定]丁寧・過去]叙述]

タデス(タ+B類デス) [[[] -ta]-desu] [[[] 過去]丁寧叙述]

このように、B類のデスは分割できない1個の形態素であり、文法的には-ta-に後続する[態度]の-φと同じ職能である。また形態的には、タと共起してもデスという形であって、デシタのデシのように形を変えない。つまり活用しないのである。

以上のようにデスには2種類のものがある。両者は文法的に異なる別の形式である。ダとデスの分布が一致しなかったのは、表2の中に両者を区別せずに並べたためである。A類とB類の相違をまとめると次のようになる。

	A類デス	B類デス
接続	名詞、形容動詞語幹など	形容詞などの連体形語幹
形式の構造	-de-s-u	-desu
意味	断定+丁寧+叙述	丁寧叙述
職能	[[[命題]判断]態度]	[[[]]態度]
対応する非丁寧形式	-da-φ	-i -φなど

なおB類デスの意味「丁寧叙述」は、丁寧と叙述という2個の意味ではなく、1個の意味を表している。「書くな」のナは、意味成分としては「否定・命令」であるが、「禁止」という1語で表す用語があるので、1個の意味であることが分かる。しかし「書くまい」のマイは1語で表す用語がないので、「否定意志」ということになる。「丁寧叙述」もこれと同様であって、叙述・命令・推量などと対立する1個の意味を表しているのである。

デスとタとの共起で補足すべきことがある。「春だった」の丁寧表現は、タの前のダを丁寧にした「春デシタ」である。筆者の世代には「春だった」にB類デスを接続させた「春だったデス」は不自然である。しかし井上(1995)では「山かったです」を新形としているので、今ではこれも丁寧表現のゆれかもしれない。この形については後の体系変化のところで通時的に見る。

3 デショーの特徴

デショーは動詞を含む全ての形式に接続する。これをデスのようにA類とB類に分けると、次のようになる。丁寧推量が1個の意味単位であることは上の丁寧叙述と同様である。

A類 春でしよう [[[haru-de]-sj]-oo] [[[春・断定]丁寧]推量]

B類 書くでしよう [[[kaku]]-desjoo] [[[書く]]丁寧推量]

A類デショーの-de-sj-は、デシタの-de-si-と同様に、デス-de-s-の「活用」した形式の一つであり、名詞などに接続する。B類デショーは、全体で1個の形態素であり、[態度]の職能だけを持つ形式である。

ここで保留しておいたダローに戻る。ダローも、デショー同様に、上のようにA類とB類の2種類の形式に分ければ、ダなどとの相違が説明できる。名詞などに接続したダローは述語化と推量とを表す-dar-ooであるが、形容詞などに接続したダローは述語化に無関係の形式であり、A類-dar-ooの-ooと同じ推量だけを表す。

A類 春だろう [[haru-dar]]-oo] [[春・断定]推量]

B類 書くだろう [[[kaku]]-daroo] [[寒い]推量]

デショーは、表2の範囲でなら、デスのA類/B類の分類と同じように、環境の相違と述語化の有無で説明できる。表1のダローも同様である。しかしデショーは、表4のように過去のタと共起した場合、全ての環境でタの後に現れるのである。名詞に接続する場合でも、デシ+タのようにタの前に現れることはなく、名詞+ダッタという連続のタの後に接続する。従って表4のデショーは全てがB類ということになる。ここでは、タと共起するとA類が現れないというデショーの特徴を強調しておく。

表4 デショーとタの共起

名詞など	春だッタデショー	春だッタダロー
形容動詞	静かだッタデショー	静かだッタダロー
そうだ	死にそうだッタデショー	死にそうだッタダロー
動詞	書いタデショー	書いタダロー
形容詞	寒かッタデショー	寒かッタダロー
ない	書かなかッタデショー	書かなかッタダロー
たい	書きたかッタデショー	書きたかッタダロー

以上、前節と本節でデスとデショーの特徴を見てきた。ここでデス等による丁寧表現についてまとめておく。

まずデスの特徴は次のようである。

- ① デスには、名詞などに接続するA類と形容詞などに接続するB類がある。
- ② デスは動詞には接続しない。
- ③ A類のデスは、ダを丁寧にしたものである。
- ④ B類のデスは、ダと無関係の丁寧表現である。

上の①と③はデショーにも適用できる。しかしB類デショーは、動詞にも接続するし、ダローと無関係ではなく、ダローを丁寧にした形式であるから、②と④は適用できない。またB類デスは形容詞などに接続するだけであるが、B類デショーは全ての場合に用いられる。従ってB類デスとB類デショーとは異なる種類の形式であると考えた方がよい。

一方、A類のデスの-s-、デシタの-si-、A類のデショーの-sj-は異形態の関係であるから、A類の3形式は1種類の形式が環境の相違によって形を変えた(活用した)ものである。

以上をまとめると、デスに関する丁寧表現を構成する形式は、A類の-de-s-とその異形態、B類の-desu、B類の-desjooの3種類とすることができる。

4 丁寧表現の体系

本節ではデス等による丁寧表現の体系を見る。現代の丁寧表現には動詞にマスの接続したものもある。本稿ではマスに触れなかったが、マスは、タの前に現れる[判断]の形式であるから、A類のデスと同じように考えてよい。

(13) 書きました [[[kaki]-masi-ta]-φ] [[[書く]丁寧・過去]叙述]

マスによる表現には、否定や意志の「書きません」「書きましょう」などもある。また古い表現として「書きますまい」なども存在する。しかしデスには意志の表現はないし、表2で否定の丁寧表現を「書かないです」としたので、「書きません」には触れない。以下では、表2～4で見た叙述、過去叙述、推量、過去推量の形式を取り上げる。

現代の全国共通語の丁寧表現に用いられる形式は、前節でまとめたデスなどの3種類にマスを加えた合計4種類である。これらに前接する形式を名詞、動詞、形容詞で代表させ、名詞は述語化のダの接続させた「名詞-de-」とする。ダに当たる-de-は異形態をも代表している。こうしてできた表5が本稿で扱う範囲の丁寧表現の体系である。

表5 現在の体系

	叙述	過去叙述	推量	過去推量
名詞-de	-s-u	-si-ta-φ	-sj-oo	-ta-desjoo
動詞	-mas-u	-masi-ta-φ	-desjoo	-ta-desjoo
形容詞	-desu	-ta-desu	-desjoo	-ta-desjoo

表5の諸形式は、前節までで見たように、必要な形態素を枠組みに従って連続させたものばかりであり、構造上はどれも問題のない形式である。しかしこうして表にしてみると、これらの間に文法体系と言えるような形式的統一性が見られない。一つの原理に基いて構成された形式の体系ではなく、A類とB類という構造の異なる形式が混在しているからである。それも、例外的なものもあるというような程度ではなく、A類5個とB類7個で相補分布になった状態である。表5は意味の世界をカバーするために、異種の文法体系の部分と部分を継ぎ合わせたものであると言えよう。これでは意味を表すための形式を並べた一覧表であって、とても五十音図や動詞活用表のような整然とした表とは比べられない。

現在の丁寧表現はこのように不統一な部分があるから、名詞述語の場合、叙述の「春です」から推量の「春でしょう」は類推できるが、過去叙述「春でした」から過去推量「春だったでしょう」は類推できない。

春でした [[haru-de]-si-ta]-φ] [[[春・断定]丁寧・過去]叙述]
 春だったでしょう [[[haru-daQ] -ta]-desjoo] [[[春・断定] 過去]丁寧推量]

5 古い丁寧表現

本節では、丁寧表現が一つの原理に基いて構成されていた時代の体系を想定し、それと対比しながら、現在の体系の特徴を確認する。ここで述べるのは、体系とそれを構成する原理についてであって、個々の形式の史的变化ではない。

前掲の表4で、デショーやダローが全てB類であるのは偶然の結果にすぎないのであって、日本語の文法的枠組みでは、A類の形式で過去推量の表現ができないというわけではない。かつてはA類で過去推量が表現されていた。

(14) 春だったろう [[[haru-daQ] -tar]-oo] [[[春・断定] 過去]推量]

(15) 春でしたらう [[[haru-de]-si-tar]-oo] [[[春・断定]丁寧・過去]推量]

昔は、未来のことについては「書こう」「寒かろう」というように、意志も推量も-ooで表してい

たが、後に「書こう」などの-ooは意志や勧誘だけを表すようになり、推量には-darooを使うようになった。こうして-darooが推量という[態度]だけを表すB類になったために、動詞にも接続し、タと共起した場合にはその後に見れるようになったのである。

前節のように、名詞述語の過去推量は、現在の体系では他の形式から類推できない。ただしこれが伝統的な(15)の形であれば、他の形式と同じ構造で、整然としたものになる。

春です	[[[haru-de]-s]-u]	[[[春・断定]丁寧]叙述]
春でした	[[[haru-de]-si-ta]-φ]	[[[春・断定]丁寧・過去]叙述]
春でしょう	[[[haru-de]-sj]-oo]	[[[春・断定]丁寧]推量]
春でしたらう	[[[haru-de]-si-tar]-oo]	[[[春・断定]丁寧・過去]推量]

このように、過去推量に伝統的な形が用いられていた時代には全体を一つの原理で説明できたが、推量がデショーに交替したために体系に不均衡な部分が出てきた。名詞述語以外の部分も同様と思われる。従って整然とした体系の時代があったとすれば、それはA類の形式だけで構成されていた時代であろう。現在の体系はA類の体系の中にB類の形式が混入している状態、通時的に見れば、A類の体系からB類の体系へと変化していく途中の状態だということになる。従ってA類だけの体系の姿やそれを構成する原理、さらに後に述べるB類の体系と対比すれば、現在の体系の歴史的立場とその特徴を確認できる。

かつての「寒うございます」や「春でしたらう」から推測すると、A類だけの昔の体系は表6のようである。この時代、丁寧を表していた形式は、名詞では-s-、動詞では-mas-、形容詞では-gozaimas-という、前接の形式によって定められた形式であった。それらの後に[態度]の形態素などが接続していたのである。ゴザイマスは、動詞ゴザル+マスであるが、便宜上ここでは表5に合わせて形容詞に接続する1単位の形式として扱う。

表6 昔の体系(A類の体系)

	叙述	過去叙述	推量	過去推量
名詞-de	-s-u	-si-ta-φ	-sj-oo	-si-tar-oo
動詞	-mas-u	-masi-ta-φ	-masj-oo	-masi-tar-oo
形容詞	-gozaimas-u	-gozaimasi-ta-φ	-gozaimasj-oo	-gozaimasi-tar-oo

表6では、叙述/推量の対立が-u~-φ/-ooによって、過去/非過去の対立が-ta-の有/無によって区別されているし、対立関係を表現するこれらの形態素が全形式で共通である。形態法が分析的であって、形態素の取り替えや付加・除去が自由であるから、丁寧や過去などの意味を1個増減させるためには形態素を1個増減させ、叙述と推量という1個の意味を取り替えるために形態素を1個交換する。これは膠着語の基本原則であり、昔の体系はこの基本通りである。従ってA類の原理による体系では、形態素の形と意味及びそれらの接続の規則が分かれば、表6がなくても説明できるし、それぞれの形式は他の形式との関連で類推できる。

昔の体系ではゴザイマスを含めてマスが大きな部分を占めている。現在の体系はそのマスの領域にデスやデショーが侵入してきた状態である。このような変化の方向は、B類の発生とその用法の拡大と言ってよい。B類の形式は、意志と推量とを区別しなかった表現を、意志の「書こう・書きましょう」と推量の「書くだらう・書くでしょう」とに分けたことから発生した。このB類の使用によって、意志と推量が別の形式で表現できるようになったという利点はある。しかしそれ

によって意味の表現が若干整理されただけであって、そのために形式の統一性が崩れたという犠牲の方が大きいような気がする。

6 将来の丁寧表現

現在の体系は、過渡期のものであって、固定されて長く存続するとは思えない。安定した体系へと向かおうとする力が働くはずであるから、今後さらにB類の方向へ進むであろう。丁寧表現がB類化するのには、日本語の構造から見ても当然と言える。冒頭で述べた枠組みのように、述語の構成では客観的な情報が先に現れ、次に主観的な部分が現れ、表現のし方を表す形式はさらに後になる。丁寧表現は敬語法の一部と考えられているが、尊敬表現とは文法的機能が異なる。尊敬のレル〜ラレルは、対象に対する話し手の評価という[判断]を表す形式であるから、過去のタの前に現れるのが当然である。しかしデス・マスは、対話場面における話し手／聞き手という人間関係の現れであって、伝達される情報とは直接の関係がない。対話場面では非言語的に表現されることも多い。本稿では方言に触れないが、諸方言では「行くか」「行くかい」のイのような人間関係を表す形式は末尾に現れる。丁寧表現のデス・マスが[判断]の形式としてタの前に現れるという、全国共通語の枠組みの方が不合理なのである。これらがB類となって述語構造の末尾に近づいていくことは、日本語全体の特徴とも一致している。

現在では前接形式によってB類化の進行に差があるが、今後さらに変化が進んでいくと、予測される到達点は、全ての表現にB類の形式が用いられる表7のような体系である。そうなると、前接の形式に関係なく、叙述にはデス、推量にはデショーを接続させればよいから、表5や表6より単純になり、「書くです」という表現も普通になる。また意味表現に必要な形態素を枠組みに従って連続させるという膠着語としての原則は保たれているので、形式の類推も容易である。

表7 将来の体系(B類の体系)

	叙述	過去叙述	推量	過去推量
名詞(-de)	-desu	-ta-desu	-desjoo	-ta-desjoo
動詞	-desu	-ta-desu	-desjoo	-ta-desjoo
形容詞	-desu	-ta-desu	-desjoo	-ta-desjoo

表7の-de-suや-desjooは[態度]を表すB類の形式であるから、「春です」「春でしょう」には述語化の形式(A類-de-)が接続していない。しかし丁寧叙述デスなど、話し手の態度を表す形式が接続しているので、その名詞が述語であることは明白である。他の形式で言えば、疑問のカの接続する「春か」のような形式は、タが接続しなくても述語であることが分かる。表7のデスやデショーもこのカとほぼ同様に考えてよい。ただし過去の表現には、タを接続させるための形式を必要とするので、「春だったか」「春だったです」のように、ダツタが現れる。このダツタが存続していることから考えると、表7の名詞述語のデスは、将来になってもA類-de-s-uのまま残っているのかもしれない。これは今の段階では予測できない。

表7(B類)の体系には丁寧という意味だけを表す形態素がない。表6(A類)では-s-や-mas-という丁寧表現専用の形態素があり、-de-si-ta-φと-daQ-ta-φのように、その形態素が付加されれば丁寧、なければ非丁寧であった。ところが表7には形態素の有無による丁寧／非丁寧の

対立はない。-ta-desuの非丁寧は-ta-φ、-ta-desjooの非丁寧は-ta-darooであり、対立は形態素の交替によっている。つまり[態度]の表し方が複雑になっていて、丁寧叙述/非丁寧叙述/丁寧推量/非丁寧推量というように細かく区分されているのである。そのために、丁寧/非丁寧の対立を表す方法が異なっていて、A類では専用の形態素の付加、B類では意味の相違による形態素交換となっている。しかしそれぞれの形式が表現に必要な形態素の連続体であるという点では共通である。丁寧表現は、このような膠着語としての特徴を保持しながら、A類の原理による体系からB類の原理による体系へと漸進的に変化していると思われる。現在の体系は、この変化の途中であるから、原理の異なる2種類の形式が混在している。

井上(1995)は「デスの進出過程」として表8のようにまとめている。しかし説明の方は社会言語学的視点から形の交替について述べている部分が多く、文法的なことについての考察はほとんどない。また前述のように、「山ダッタデス」を新形として出している。

表8 デスの進出過程

		→ デスの進出		
		名詞 山(ダ)	形容詞 赤イ	動詞 行ク
↓ デスの進出	推量	山デショウ	赤イデショウ	?行キマショウ 行クデショウ
	打消	山ジャアリマセン n山ジャナイデス	赤クアリマセン n赤クナイデス	行キマセン n行カナナイデス
	打消 + 完了	山ジャアリマセンデシタ n山ジャナカッタデス	赤クアリマセンデシタ n赤クナカッタデス	行キマセンデシタ n行カナカッタデス
	完了	山デシタ n山ダッタデス	?赤イデシタ 赤カッタデス	行キマシタ ?行ッタデス
	断定	山デス	n赤イデス	行キマス ?行クデス
		?受容度疑問	n新形	

後の井上(1998)ではそれが簡略になって、表9のようになっている。ここでは「動詞+デス」の形を「将来の言い方?」としている。

表9 デスの進出(井上1998 原文は縦書き)

	名詞	形容詞	動詞
古い言い方	スーツです	高うございます	行きます
新しい言い方	スーツです	高いです	行きます
将来の言い方?	スーツです	高いです	行くです

表9の分布からですの広がっていく様子が分かる。しかしこれを、「古い言い方」→「新しい言い方」→「将来の言い方?」という直線的な「デスの進出」とすることはできない。デスの構造や役割が考慮されていないからである。形容詞や動詞に接続するデスは、本稿の用語で言えばB類と

いう別のデスであって、現在の「スーツです」で使われているA類のデスの単純な進出ではない。従って文法的には「新種のデスの発生と進出」というのが正確であろう。

7 言語変化と体系

表7の体系には名詞述語のデスなど予測できないところもある。言語変化は、起きてみなければ何がどちらに向かっているのか分からない。従って将来のことは、現在のことばを資料として利用できる範囲で、今の段階より一步進めた状態を予測できるにすぎない。

これに比べると、表6の昔の体系は整然としたものである。過去の言語体系は存在する資料の整理と解釈であるから、統一的に説明できる。丁寧表現だけではなく、同一原理によって述語構造の全体についても述べられるだろう。しかしそのことは、ある時点で表6のような体系が個人のラングとして存在したということとイコールではない。表6はある期間内に実現したA類の特徴全てを集めて一つの共時面上に整理した結果である。若干の時間幅を持たせれば、動きの中でそういう現象全部が実現していると思われるが、それら全てが同時に実現していて、ある個人に使用されていた体系であったかどうかは別である。

静止した共時的な体系というものは所詮研究上の作業仮説に過ぎない。従って表6の昔の体系も現在の体系を説明するために構築した仮説であって、ある時点で実在した体系であるという保証はない。というより表6に近い体系であった時点でも、A類の形式が有力ではあったが、それ以前や以後の形式も混在していた状態というのが正解であろう。どの時点の共時面を切り取っても、その体系はそれ以前からのP類と新しく侵入してきたQ類とが混在するものとなっているはずである。そういう意味では、一つの原理で説明できない現在の体系も決して特殊なものではない。研究者はP類またはQ類だけの純粋な体系を追究しようとするかもしれないが、追究できるのは、1原理による純粋な共時的体系の姿ではなく、純粋な体系を構成する原理である。研究者がすべきことは、過去の資料から、それぞれの時代の支配的な原理と、それに至る、あるいはそれから離れる言語の流れを発見することである。それらを利用して構築されたP類やQ類だけの純粋な体系が、実在の過渡期の体系を説明するための作業仮説となるのである。

今のところ、動詞+マスの形式は安定しているし、名詞+A類デスも強力である。丁寧表現がB類の原理による体系になるのは先のことであろう。たとえそうなったとしても、そのときにはさらに新しいC類の形式が侵入していて、体系の一部に別の「ほころび」が発生しているにちがいない。共時は通時の中で動いている共時であり、言語体系の研究では過渡期の折衷型体系という課題から逃れることはできない。

引用文献

井上史雄(1995)「丁寧表現の現在—デス・マスの行方」『國文學—解釈と教材の研究』40-14學燈社

井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』岩波書店

辻村敏樹(1964)「面白かったです・面白かったです」『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院

丹羽一彌(2005)『日本語動詞述語の構造』笠間書院

(信州大学名誉教授)